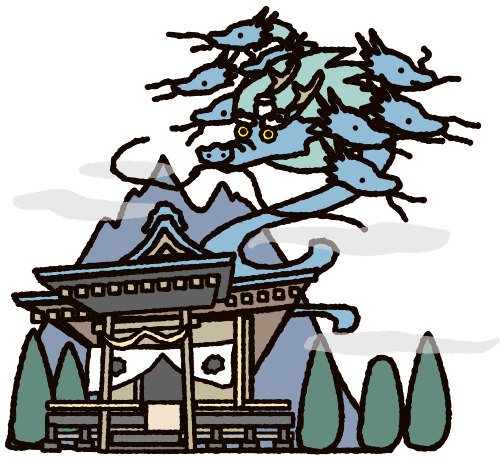
わがマチの戸隠神社

小松 和彦



私は現在、兵庫県の猪名川町（いながわちょう）に住んでいる。阪神地区のベッドタウンの一角、周囲を里山に囲まれた自然が豊かなところである。家のすぐ近くに戸隠神社を鎮守とする昔からの集落がある。社殿は室町時代の造営で、国の重要文化財に指定されている。

なぜこのようなところに、こんな立派な神社があるのか、信州の戸隠神社との関係は、と思って調べてみたが、地元には全く史料が残っていなかった。だが、意外なことが明らかになった。源頼朝や義経の先祖で、清和源氏の祖・源（多田）満仲との関係である。

戸隠の鬼といえば、能の「紅葉狩」で知られる平維茂が有名だが、実は『太平記』にはこの満仲が戸隠の鬼を退治したとある。ひょっとしたら満仲と戸隠との間には、世間にはあまり知られていないつながりがあったのではないか。そう思ってさらに調べると、実に興味深い伝説があることがわかった。『多田縁起』などにも見える話で、住吉明神の霊験譚であるとともに、この多田という地名の由来譚としても伝えられてきたものである。

満仲が自分の本拠とすべき地を求めて住吉社に参籠したところ、明神が示現して矢を授け、この矢を虚空に放ち矢が落ちたところを宿願の地とせよ、と託宣した。満仲がその通りにすると、矢は住吉の遙か北の山の方角に飛び去った。これを追って山の峯まで来ると、そこに庵を結んで住む老僧がいたので、矢の行方を尋ねた。すると山の麓を指し、次のように語った。

その辺りの川は大きな池になっていて、そこには人を呑む九つの頭を持った大蛇が棲んでいた。ところが、さきほど、南の方角から光り物が飛んできて、その池に落ちたところ、例の大蛇が山を崩し水の流れも変わるほど暴れ狂い、不思議なことに、そこにあのような平地ができた、と。

麓に下りてみると、九頭の大蛇が額に矢を射られて死んでいた。満仲はこの地こそ宿願の地と思い、大蛇を「九頭龍権現」として祀り、その平地にたくさんの田ができたということで「多田」と名づけて彼ら一党の本拠とした。

私の家の近くの戸隠神社が、このときの九頭龍を祀った神社なのかは定かでない。だが、この地域には他にも戸隠神社や九頭神社も散見される。おそらくこうした伝説を生み出しながら、水害・水難除けを願って建立されたものであろう。いったい誰がこの地に戸隠の信仰を伝えたのだろうか。戸隠は全国各地に、信者団体の戸隠講を持っていた。そのそれぞれにこのような戸隠の神秘が語られていたのではないか。その上に戸隠の信仰は成り立っていたのではないか。知りたいことが次々に湧いてくる。

それにしても、戸隠との不思議な縁を感じずにはいられない、わが住み処である。

（こまつ かずひこ　国際日本文化研究センター名誉教授）